

•
•
•

バシユー！

今度は結界の壁にひびが入った。エネルギーを蓄えて撃つため、連射はできないが、効果はあったようだ。

アナン「やったー！」

黒魔法使い「ん？ なんだこの光線銃は？ 物理的な銃弾ではこの結界に傷すらつけないはず。……おまえら、未来からやってきた者たちか？」

ボルトンが2発目を撃とうと構えたとき、黒魔法使いは新たな呪文を唱となえた。すると結界は、さらに薄気味悪く、強く光り出した。

バシユー！

ボルトンは再び、光線銃を放った。しかし光線銃は完全にはじき返された。そしてさきほどのヒビも元どおり直っていた。

ボルトン「ち、だめか！」

アナン「まさか、最大出力の光線銃で傷一つ、つかないなんて」

黒魔法使い「無駄だ、俺を誰だと思ってるんだ。ガラムバード様をあまく見たな」

ポルトン「ち、やはりガラムバードか」

あおい「ガラムバードって？」

ポルトン「ああ、奴は黒魔法の術師で最高位にいてな、いや最下層のゲス野郎といったほうがよいか。過去にも未来にも時間を移動できる最も危険な魔術師の一人さ。あのガキ、とんでもないものを呼び出しやがったな」

あおいはさらに青ざめた。

ガラムバード「もうおまえたちの茶番には付き合っていられない。こいつの魂は俺がもらっていくからな」

ぐあー

奏太は激しい悲鳴を上げた。首元をつかまれて苦しそうだが、まるで魂のエネルギーを吸い取られているようだ。その姿はまさに魂を吸い取る吸血鬼のようだった。

今度は、ポルトンとアナンが同時に同じ場所に光線銃を撃った。しかし結界はびくと

もしなかった。

ガラムバード「ふ、バカなまねを。そんなちんけな光線銃で、俺の結界を壊せるわけないだろ！」

今度は、二人で同時に結界に向かってタツクルした。しかし結界はびくともしないどころか、二人とも床に弾き飛ばされた。

ポルトン「こいつはまいったぜ」

アナンもポルトンも手を尽くしたとき、あおいが立ち上がった。

あおい「待っててね、奏太！」

あおいは黒魔法使いに向かって大声を出した。

ん？

すると黒魔法使いは、なぜかあおいの声に反応した。黒魔法使いは思った。

(どこかでこの声……聞き覚えがわずかにあるぞ)

黒魔法使いは奏太を掴みながら、あおいの様子を見ていた。

あおい「奏太、あたし、今からそっちに行くからね！」

「ええい！」

あおいは声を上げて、結界に体をぶつけた。

ガン！

「きゃー！」

あおいは弾き飛ばされて、床に倒れた。しかしあおいは立ち上がり、再度、結界に体をぶつけようとしていた。

アナン「あおいさん、無理です。やめてください！」

しかしあおいの耳には、アナンの声が聞こえない。

「奏太！ 必ずあたしが助けてあげるからね。辛いけどもう少しだから……待っててね」

あおいは、もう一度、結界にタックルした。

ガン！

しかしあおいの努力もむなしく、再びはじかれて床に飛ばされてしまった。それでもあおいは立ち上がった。

奏太「あおいちゃん……もういい、やめるんだ……」

黒魔法使い「奏太、あおい……そうか、思い出したぞ。こいつら、学校の部室で電話をしていた奴らだな」

あおい「どういうことよ？　なんであたしたちのこと？」

奏太「お、おまえなんて知らないぞ……、ぐ、ぐわー」

あおい「奏太！」

黒魔法使い「ふふふ、おまえ、その女からは何も聞いていなかったようだな。おまえは今から3年後の未来、たしか7月30日の深夜だったかな。西凛大学の部室での実験で、俺にやられて命を落としたんだ」

奏太「な、なんだとー。お、俺が3年後の未来できさまにやられただと……」

黒魔法使い「どうやら、その女かタイムポリスの影響で歴史が少し変わったようだな。しかしおまえはとことん不幸な奴だな。未来でも過去でも二度も俺にやられるなんてないや、俺様にやられることはむしろ光栄なことかな」

奏太「未来で俺はきさまにやられたと言うのか！ でたらめを言うな！」
黒魔法使い「ふふふ、おろかな人間には何を言っても理解できないようだな」

この会話を聞いてアナンがあおいに声をかけた。

アナン「あおいさん、奏太さんはひよつとして……未来でも黒魔法の召喚実験をして奴に消されたんですか？」

あおい「黒魔法使いのことは誰も知らないわ。奏太が亡くなった瞬間は誰も目撃していない。でも奏太が亡くなった場所には、ここの倉庫と同じように、床に逆さ五芒星ごぼうせいの模様が敷かれてあったわ」

奏太とアナンとあおいの会話を聞いて、黒魔法使いは応えた。

黒魔法使い「確か以前……いや3年後の未来かな。こいつが作った魔法陣の入り口から、電話の声が聞こえてな。確か『奏太、あおい』とか呼び合っていたな。これから魂のエネルギーを吸い取られることも知らずに、のんきに電話してたよなあ！」

あおい「そうか、あの電話をしているとき、すでに奏太は、魔法陣を完成させていたのね」

黒魔法使い「バカな男だ。この魔法陣の意味をまったく知らず、興味本位で俺様を呼び出すとわな」

あおい「じゃあ、あんたなのね！ 未来で奏太の命を奪った張本人は？」

黒魔法使い「ふふふ、そうだ！ 事情は知らんが、霊界通信機の開発は3年早まったようだな。それにしても、二度も俺にやられるとは……。なんて間抜けなコンビなんだ、おまえらは」

ここでポルトンは疑問に思ったことがある。

黒魔法の親玉は、ただの学生の実験に通常は出てこない。普段は地獄の最深部に潜んでいることが多く、親玉が現れるときは、常に地上の大物たちを狙ってやってくる。ポルトンは、奴の行動の矛盾点を感じた。

ポルトン「ガラムバード、なぜおまえほどの親玉が、二度も……たかが学生の研究なんかにやってくるんだ！」

黒魔法使い「霊界通信機なんていうものが世に出回ったら、困るんだよ！ 俺たちは！」

ポルトン「ふっ」

アナン「なるほど、そういうことですか……」

ポルトンもアナンも何かに気づいたようだ。

あおい「アナン、いったいどういうこと？」

アナン「24世紀ではあの世があるということは常識になっていきます。霊界通信機は本来、21世紀の末に実験が成功してね。霊界があると科学的に証明されてから、死後、迷った世界、いわゆる地獄に行く人口も少なくなりました」

あおい「それってみんなが天国に帰れるってことでしょ。いいことじゃない？ それでなぜ、奴は邪魔をするの？」

アナン「さあね、死後に迷う人が少なくなることを嫌がる奴らが、あの世にもいるってことですよ。意図的に地上を混乱させて、迷った人を増やしてね。あの世での自分の勢力を広めようと考えている、どうしようもない霊もいるんでね。その一人の親玉的な存在が奴なんですよ」

あおい「……」

アナン「霊界通信機が目に見える形で証明できれば、地上の誰もがあの世の存在を知り、天国と地獄があるとわかり、死後にあの世で迷う人が少なくなる。だから奴にとつて霊界通信機は、自分たちのテリトリー、地獄の勢力を広げるのに、大変、都合が悪い、ことですよ」

あおい「でも、ガルムバードって奴、もう死んでるんでしょ。なんで死んでもそんなこととするの？」

アナン「死んでもわからない奴がああ世にもいましてね。きっと何億年、経つてもわからないですよ。奴はね」

あおい「ただのおバカさんじゃないの？」

すると黒魔法使いは怒りだした。

黒魔法使い「なにを言うんだ。この小娘め！　こうなったらすぐにでも、こいつの魂の全エネルギーを吸い取ってやる！　あと5分経てばこいつのエネルギーはゼロになるぞ！」

奏太「ぐ、ぐわー」

黒魔法使いは、一気に奏太の魂エネルギーを吸い取りにきたのだ。

(省略)

第4節 宝石の秘密

奏太は今、目を覚まそうとしている。数分、いや数時間、経ったのだろうか。時間の感覚さえわからない。そもそも俺は今、何をしているのだろうか……。

は……

奏太は我に返った。そして目が覚めた。

「お、俺はいつたい……」

目を開くと、目の前であおいが心配そうな顔をして、奏太を見つめている。

「そ、奏太、よかったー！ 目覚めてくれて。よかった、本当によかったよ。ぐずん、えーん」

奏太が目覚めるなり、あおいはいきなり大声で泣き出してしまった。あおいの涙で、奏太は倉庫で起こった一連の出来事を思い出した。最後は気を失っていたが、あおいが命がけで奏太を守り、あの恐ろしい怪物を追い出してくれたことを、うっすらと憶おぼえていた。

「あ、あおいちゃん、なんでいつも……俺のために……そんな無茶を……」

あおいは涙を流しながら言った。

「だって、だって、二度と奏太を亡くしたくなかったんだもん。ぐずん」

奏太は、黒魔法使いが「あおいが未来の世界からやってきた」と言っていたことを聞いて、はっきり確信した。

「あおいちゃん。やはり……3年後の未来からやってきたんだね」

「あれ、やっぱり気づかれちゃったんだね……」

「あの怪物も、未来の俺のこと話していたから……それに俺、地下室のタイムマシンもすで見つけていたしね」

「なんだ、地下室のことまで知っていたんだ。でも本当によかったよ、奏太が無事で……」

ん？

ふっと奏太は、床に落ちていたあおいのネックレスが目に入った。奏太はネックレスを拾って、宝石を見てみると、宝石は今もほのかな光を放っている。今まで宝石の光は、強烈な光を放った後はすぐに消えてしまったが、今回はほのかに輝き続けている。しかしその輝きは、今にも消えてしまいそうな弱々しい輝きに見えた。

「あおいちゃん、この宝石は……」

「うん……」

奏太もこの宝石に見覚えがある気がするが、思い出せない。それはそうだ。その宝石

は未来の奏太からプレゼントされたものだ。あおいが返答にもたついてる間に、奏太が先に話しかけてきた。

奏太「この宝石、今までに3回輝いたよ。トラックに引かれそうになったとき。タイムポリスをやったとき。そして今回……。いずれも俺が危機のときに輝いて……。まるで宝石が俺を救うのを手伝ってくれてたみたいだよ……」

実はあおいも、奏太の危機のときに、なぜ宝石が輝いたのかわからなかった。そのとき、脇からアナンが声をかけてきた。

アナン「それはおそらくベガ光石ですよ」

奏太「ベガ光石？」

アナン「その宝石、もともとは、奏太さんのおじいさんが持っていたものですよ」

あおい「え？ これは未来の奏太からあたしへのプレゼントで……」

アナン「どういう事情か知らないですが、今はあおいさんが持っていたんですね」

奏太「俺のおじいちゃんが……そんな宝石まで開発していたのか？」

アナン「いいえ、少し違います。その宝石は地球のものではありません。ベガ本星にあ

る極めて珍しい宝石なんです」

奏太「ベガ本星？ おじいちゃんは宇宙船までつくっていたのか」

アナン「言ったでしょう。奏太さんのおじいさんは250年後の未来からやってきたことを。未来では宇宙旅行も盛んになっていましてね。今の時代の人には信じがたいでしょうが、異星人たちとの交流は普通にあるんですよ」

奏太「そうか、おじいちゃんは未来の世界で宇宙人から手に入れたんだ……」

アナン「そうですね。しかしベガ本星の人たちは、他の異星人たちの前にはなかなか姿を現さなくてね。実は**ベガ本星は、私たちの時代でも謎に包まれている神秘の星**なんです。しかしおじいちゃんは、宇宙探査のときに、偶然、ベガ本星の宇宙船の事故を助けてね。そのときのお礼として、このベガ光石をもらったって言っていましたよ」

奏太「そうだったんだ。ところでその……ベガ光石がなんで、俺の危機のときに輝いて、俺を助けてくれたんだ」

アナン「ベガ本星は本当に不思議な星です。**ベガ本星は、主神ヒームさまが治められる星**と言われ、星の人たちは温和と調和と愛に満ちた人たちがばかりが住んでいます。そして**大宇宙の魔法の根源にあるのが主神ヒームさま**と伝えられています。ベガ本星は、あ

るときは物体となつて現れ、あるときは霊体となつて星そのものが三次元宇宙から姿を消す。だから魔法の星とも言われているんです。そしてベガ光石は、ベガ本星の鉱山から採取されたものなんです。半分は物質で半分は霊エネルギーと言いますか。だから、ポルトン部隊長が光線銃であおいさんを撃つたとき、光線銃のエネルギーをこの宝石が吸い取ってしまったんです。それであおいさんは無事だったんです」

ポルトン「コホン、その話はよさんか」

ポルトンは恥ずかしそうな顔をした。

アナン「部隊長、でもそのおかげで部隊長も助かったんですから。危うく間違つた殺人で罪を犯すところだったんですよ」

ポルトンは恥ずかしそうな顔をした。

アナン「そしてこのベガ光石は、強い思いや願いに強く反応し、思いを実現する強力な力を宿しているんです」

奏太「……ということは、あおいが俺を助けたいと真剣に思ったから……」

アナン「まさにそのとおりですね」

あおい「この宝石にそんな力があつたなんて知らなかった……」

アナン「きつとあおいさんがこの時代にやって来られたのも、ベガ光石の力もあつたと思えますよ。第一、21世紀の人がタイムマシンで過去にやって来るなんてありえないですから。きつと宝石の力が導いてくれたんですよ。まあ、それだけあおいさんが奏太さんのことを大好きだったということですけどね」

あおい「えへ」

あおいは、奏太を見ながら照れてしまった。奏太もすっかり赤くなっていた。

奏太「おっほん、しかしそんな便利な宝石なら……もし悪い願いでも叶えられたら、大変なことになってしまいう危険なものではないか？」

アナン「いえいえ、ベガ光石は愛の思いが深まったときだけ反応するんです。なにせベガ光石の別名は、『ベガの光』ですから。実は宝石自体にベガの神官の魔法が籠っているんです。だからあの黒魔法使いが宝石の光を見たときに、苦しんであつという間に消滅したんですよ。ベガの魔法と黒魔法はまったく別物と言うか正反対のエネルギーなんです」

奏太「そうだな……。私利私欲の願いでも叶うんだったら、世界を破壊しかねないしな」
アナン「それにベガ光石には寿命があるんです。ほら、宝石を見てごらんなさい。今、

点滅していますよね」

ベガ光石は、まるで電池が切れる前の蛍光灯のように光の力が弱まっているように見えた。

アナン「ベガ光石は、あと使っても1回しか使えないでしょうね。きつとさっきの黒魔法使いとの戦いで、大部分のエネルギーを使ってしまった感じですから」

奏太「ベガ光石のことはわかったんだけど……ところでなんでアナンが、俺のおじいちゃんのこと、詳しく知っているんだ？」

アナン「だって、私のおじいちゃんですから」

奏太「え——！ おじいちゃん、未来で結婚してたのか！」

アナン「そういえば、まだ奏太さんには話してなかったですね。でもおじいちゃんは子供、つまり私の父が生まれた直後に離婚し、そしてまもなく行方不明になってね。それから私の父は、今の未来科学研究所のカルヴァン名誉会長に養子として引き取ってもらったんですよ」

奏太はすっかり驚いてしまった。